中村俊定文庫
文庫 18
626

天明七（序）重厚撰

乞食布施

序

洛の重厚ひとつ乃逸囊をおり
詩ゆ歌まなま釈氏の
三衣いるものゑ似らすしてて
ものおほひるをや喻壺中ま
乾坤をそなるらめく者私乃
風物多ゆるふり如て襟ま縮て

杖を曳とき飢て小玉味噌麦飯よ
あしらひ或ハ蓴味噌膳を
ちりる又花の宿あるる蜜の
苔亀鯉し是を客つけて食
俄といひ中ふり

天明丁未夏

雪中庵　蓼太

浅草三嵯

もゝ[illegible]食ふ焼る里　重厚
弥生十日の月を見しむ　成美
名謁ゆゑ客ふて　蓼太
肩入なつ[illegible]水搗桶　厚
寫ゆ石き乳淫ゆ吟ふし　美
温泉のつまて鯖釣ゆ　太

早稲田大学図書
中村俊定文庫

引退る人出喧嘩を落ちて　厚
かき籠てる鉦きく也　義
脚息まなや兄妹を曇らし　太
今ふる雨はくるる酒もて　厚
石垣の松とへて梅東く　美
壁石詠く小庭を京良れる　太
杉原手包の袋る蓮苔子　厚
九月小袖苔ぬる　糠雨　美

月くき北の山を見て出る
弦を輪手ふる雨かな　厚
冬嶽に加れき木曽の旅を　美
かくん雑煮をたて詠しの姥　太
夏も春古菴うま代宿かりて　義
弥いのもまれ四十二北尼　厚
小豆焼く拾垣お詠し九月流し　太
絡出る蚊屋ゆふ片隅　美

眠むこゝろきのゝ空ふゝ病　厚

遊女ゝ母をかこゝ薄京　太

葱畑根岸ゝ冬も所ゝ京　美

ふ班の鶯のいつち飛　厚

法京の笛や志ゝ吹きゝ　太

雛ゝの夜ゝ歌ゝ夫ゝゝゝ　美

以風平新ゝの雨後の月　厚

蓬莱へゝ新ゝ乱れ　太

炉ゝむゝ霖ゝ紀ゝの蒲碁打　厚

白ひくゝき所ゝ乾ゝ　美

かれ住市岩かゝ京の孫庇　太

水いさゝゝ川る鳥氣　厚

ゝをゝて所ゝもの所ゝ山　美

ゝさるゝ所ゝ晴ゝつゝ　太

梅部

うぐひすや食の哀も眼のまへ　其角

三味線の梅たてまつる食哉　江戸 成美

七輝光梅の梅さく旅寝哉　重厚

寒さくや元々きく気の朝　三敲

うぐひすや鶯の鳴かきて徐し　伯良 古敲

梅ちるや第二の世の事能　近江 蘭二

うめもとや九郎を尋ねる　筑前 依今

雪を出る時睦月さむさかな　播磨 化碩

鶯やいまもきいた兎の声　江戸 浙江

うぐひすや雪を分て雪の気　遠江 乾夕

ぬれうぐひす玉つたひ　祐之

雪の中に月は国に来られ　九董

誰住しあと梅古木の大柳　江戸 荷震

なつかしの梅を尋て梅木に　壱江 方壺

山一所の里人五百を
大内平氏を亡ぼす乃聖人
敬を尊ぶことなりけり

現鳥蒙ひきてあひぬ時代の春　蝶夢
えりをかく白ふるあ敷妙の　江戸　瑞子
はつ雪人まつ来る松の内　巴川
宝引き名残をひらやひ小正　桃李
やゝ人は古にさむし一夜の月　祥然
暖をもとめ来る鳥の鳴ふるい　近江　曽秋

初市や富貴ふくめる人　甚由
そり餅や蜜柑を苞の花　江戸　雨石
演藝化して蜆なんりも　下総　奈垣
芦の葉やまれもの秋の様　南部　平角
夕涼やかたの夜乃はの光　摂津　五巌
そゝ風や小松の中の新けり　遠江　五紘
子供等を日ゝ笑ひ春の山　江戸　戈化
かゝろふや雲をひらる門の婆　越山

竹麦に雲は昭は青さ哉　遠江　約我

惜しや詠つ詠ん生る氣　播州　雨陣

も詠人出る扇子哉　江戸　夢太

雲と明るし水なるて撫る　蘭秀

おさくさや軒屋をたく月の門　曲阿

いみへしく秋の多作と

麦まき乃ちは餅ふ人あり　麦宇

そり忘やまいるまてはのこ　菓女

し詠る人出指さ法ふ寸来

山さく程散るの後乃鳥哉　蘭更

晩食問ふる

汁の実なるぬ梅の芽　吉備　風葉

春ふて足ぬ表何ま秋日数ふ　江戸　宝来

りまや おさつ上し旅笠町　芙の　菓戸

九月三吟

夜度やと食もかく業は藝　重厚
月下羽とまれ夕かゝ乃柵　楚山
以本と家牛も岩鞍我やはをて　荷裳
判官は山は通を月　厚
鄙の安を的は石まれ晴のはて　山
ゆ是ゆ月二下鮎出嗅　裳

ウ

盥原の巻を張ひ係系俳弓　厚
暦えゝゝて詠そえん　山
のゝやのふ老ゝ袴巻通ふ灯　裳
蘇鉄てゝもし行をゆまれ　厚
大ゝや今ひゝきゝ午の旦　山
閏皐月ゝを八重にゝり　裳
姫をゝも軍なのゝ北恵ゝ詠　厚
色ゝなのをて贈る黒姫　山

兄弟のおとゝ
膳下ゝ向ふ盆ゝ鯖　厚
有ゝ
宮山の地ゝ死神のゝ　堂
ひき抜て行車ゝ油ゝ　厚
蚤も化し可出大蜘　山
鼠黒ゝ時ゝ呼ゝ死ゝ　堂
ゝみ抜ゝ十石備の牛ゝ　厚

蕎麦粉ゝ膝ゝ袂ゝ煤ゝ　山
てゝ廿ゝ夏ゝ　堂
鉢ゝ　厚
南日傳ゝ傘ゝ　山
木偶ゝ里ゝ　堂
孫ゝ世ゝ　厚
ゝ井ゝ麦　山
秋ゝ孫ゝ　堂

方の立をきゝかゝる　無門関　厚

破し茶碗のきるもなあるも　山

黄昏や板塀かゝる長普請　裳

はたゝかれし義のぬけ殻　厚

見えそめし花盥人よあかるき　山

雛の後事ひのそひそめし　裳

友の部

白食弘天地を第一義とす　甚角

玉川茶屋かきくゝ文先　暁萱

白かゝるふくゝ資中を拍子　蕉太

和の象して和とまろと花雀　几董

俊秀の象序を孔和やゝ親　重厚

乃守の懐生まゝ和尚ゝ　浙江

蕨ちや筆てて殺ぬきれ　成美
母屋もくろ子ぬ中の郭公　仙子
弓射り疲し矢走ぬ杜字　蘭秀
お坂や車とく急ぐ夜寒　武蔵　星布
壹男や新樹を白き日乃面　碩布
鴨の子若草はぬ青蓮　東蕉　東芽
うし訪ぬ新家くく多しけしの花　江戸　白麻
夏れ草ぬ色ぬ　ちのふやも見ぬ　尾全

節をはんてもぬ牡丹ぬ　江戸　莫山
寝まきぬや休ぬ板の蓮月よ　筑前　蝶醉
みの取や名ひぬ夏ぬ工　越山
十五夜とぬをより也　皐月雨　江戸　泰里
さきれや柱ぬもれ蝶ぬ　青李
ぬく面や躑躅黄ぬ　つくみぬ山　吾徒
面ぬの泣ぬ俳ぬ蛇苺　あ　江戸　沂風
かんこ鳥や鳴や小山苔ぬ　つく　江戸　重宮

飛退る人の手のうつし深雪哉　亀文

夜の雨に見めとうつる新茶哉　荷葉

夕蟬乃唐を迎まや松つくに　近江　立来

雲の下苑ゆうるる紫の蝶　陸奥　呑溟

さつきの水堀とこれきけ櫻哉　花カ　浪花　舊国

月ふる一さとみむ島の仇　江戸　一成

帆莊に風をとれうう笠ぬん月　重厚

横笛やかるふるれ乃ちの乳　平角

夜寒や波の内代ふること　吉伯　文里

訪ふ人も新見てかうて星見乃　江戸　雉口

すゝきや寒く居うへを鳥打　寸来

義仲寺夜泊

塚を出て旅に寝て　筑紫　湖桂

夕虹出芽の梅もたつやは板川　江戸　安袋

いさ古き屋根まるみえ乃川　播磨　吹石

鳥越三吟

志ふ柿を硯にうゑ食のゝ　重厚
月屋にもゝ世敷出雨　麦宇
を丹くまゝ数の里は宿かゝ　寸来
くゝを跨のふゝ訪ひをぬゝ　厚
ひのきゝ雉卯あふき盛ふ後　宇
巣くゝ嵐出てふ薙刀　来

ウ

大切を遠しふゝ三の宮　厚
手除のきぬ処ひゝ多久紀　宇
孤先は立元てつゝ勢美の格　来
鮎やつゝ年鶏飛こゝ　厚
千石出酒養志まを夜の巣　宇
俗黄砂立は牡丹咲ゝ　来
秘花きゝひゝ乃娘眼をやゝぬ　厚
まゝ八ゝ出く美濃は日をふゝ　宇

三日てくは盃をもつて膳加市　來
ものの流るる水の吹ぬる　厚
敦盛忘れ奉を見るふる藤の人　宇
木鉢は飯をこうりて　菜皆　来
節
蕗ちるき燥を見て廣評たきて　厚
元服した京都を雪ふる　宇
小豆粥を見たり泥鰌　来
百日法花を満ぬる　厚

下のうきも西乃美味の後清ふ　宇
物語をめくる冠かくふ　来
味噌の北加減をこゝろの平折敷　厚
志を見る歌舞伎唱歌なる　宇
九鏡くるる光るる風のくま　来
小町也ゝ詩下　菅　厚
月は孤京の情夜の何なく　宇
切篭出ふる見る初炉　来

ウ

花無系屋形格子いつ見しく　厚

三社詣てむすぶ山伏　来

壹丸巻中へのうれたるまま　厚

車ひきこむ　砂川茶来　宇

咲たるもものまぶるる峠　来

硯えらむ日乃新　宇

穐之部

ものつくれ合の親問ん　甚角

武隈の松も名残世や竟て　浪花二柳

ふきくるやとき安人ゑ玉梨　青蘿

賜うく竟て世や人乃上　重厚

莫黄瓜秋も名そくしは為玉　浙江

玉柳や竟き素人ゑ新　寸来

そのひきやかとかとの芽吹山　近江　太何

雲おかせし詩通ふや炉の風　蘭秀

ひとのまをて秋ゆく小庭ふ　備中　湖流

野かるも実ふる風農ゆふ風　麦穂

そをを紫乃うこ寄ハ動く柱ふ　江戸　湖未

名月や不二見ふ新といくる里　越山

姉捨や長ふまを月の出場　下総　立州

てたふ地をうかちなをふ　荷農

月よむふつの手鞠をひし舟の孫　江戸　有時

伊勢人を法法をを内見ふ　成美

を新や紫乃かやふ穂をはる　陸奥　蘭史

帰ふと月ふ松むけを新ふ天　汀風

秋くをを石を竜あ見ふ　藝太

夕雨を歌かきかもも　備後　髭風

歌代を秋を宿や　鹿か　蛍の声　陽子

山住もまを鹿笛のうの里ふ　江戸　友菊

庵なりや蚊うち曇る夜の月　倡馬　南花

ひとゝせや恋初めし人を鶴の声　里斐　可都里

なり川岩水をせきハ阿蘇の峠　江戸　其成

木嶋のつゝきあり雪の松く　江戸　有桑

妻なれ死理見をなり鶏籠　遠江　重厚

三粒ふる雨に雪ケこれも春　江戸　玄彦

冬籠やあるもたのもしの炉の鐘　江戸　蝶夢

はるき出面ひも移てさめるひ　江戸　十蘿

力なくこゝへちるけすゝ花ひ　青客

ひとゝせ高原乃上ゝ雲ゝ　素仁

若一五子死田ゝ畑ゝ
さゝ事なゝ九月の末ゝ
行ゝれるを赤の附ゝ
ゝ新ゝ古風を
おひ芋て

華人や五条乃ゝ神ゝ　成美

紙帷子乾仙

乗さもよ京食の氣象　重厚
見投をれ杖のき出岸　壹郷
数百年おさまれ代の時も来て　〃
新てふものを造をし免る　厚
その前鼠乃ね風のまた也　〃
乗けぶをく縣ふまれ秋　郷

ウ

第拾人て人出弱へる酒蔵き　画仏
大黒乃りふ而ふつまを　平角
ふ美源来拾安乃蛙ふ　重厚
かまをひらの孫手拾く　〃
二筋出矢疵つまきけ已ら世る　頑布
松明きもまれ篠原死月　〃
家ながさしふ拾職乃ふを八　奈垣
乃ふまれやと岡ひあひ条　戈化

病上がりなんとなく寂しく感ずるや　化

供物載せるを土に埋めし　垣

とぶらはれ枯れ草に咲く　黄雪

蝶とそのうたを京出し　〃

四月末日眠き昼男　秋尺

三回忌やあと三味線をひく　南古

門ひくまで切戸かけ鎖して　〃

月明き石塔こゆるとつむ　寂歩

傍輩死中云少川なるこゝに見　一菊

ぬる紅巨燵蒲団更えさびき　厚

俳諧の話とうとうふ村これ　菓

妻なきくらしに遊ひ庁よる　厚

節句まくらい書庫は小腸さし　菊

金をきく近をいく市外交島　厚

久立死を寄せれる月末　菊

いつや名物の檜舟出し　厚

ウ

とゝ〳〵ぬ茅ふ庭ぬの丸かゝ雑　鶴堂

孫四〳〵　爲つ免に今　、

淳まゝ北茅舎かきて帰る人　吹石

かゝるもけふ山間雲春　菊秀

庭北蕊たくあれ枝手琴せと　立砌

こゝ物をやゝひのなのハなゝ物　執筆

冬之部

麻布君子門の雪をゝく食れ　雪角

大比殿とゝ江えゝられてゝ乳の雪　蝶夜

ゝ月雪や影は積りし松かゝハ　諏訪素堂

何事もなき世や雪の大江山　沂風

雪ぬ人世界をひゝりゝ山の那　重厚

芝ゝく訪ゝ雪は月ゝ鳥弘　遠江知白

雪

雪の島や風さびさびと蒸煙　浙江

辛崎や雪ぬ伊吹を一木　江戸　桂阿

さゝ蟹や松を定りの　菊秀

時雨や雞鳴子走れも孫市　美美

日光をぬふや小春の文袋物　居蘿

住吉よ茶ひけ見ぬ小六月　方壺

百舌鳥のなくる雄の山乃小春哉　柳也

蔦木金子宗冬やあるむくろ　太渓

にぶりや障子の穴を日の影　近江　使遊

口切や茶ゝ里ゝ町住居　巧子

朝旦冬至

日かゝ見やゝ〻〻冬至梅　甚由

牛追ふ道ゝ通れかき晩秋　丹後　百尾

山川乃青原ゝ〻〻枯野原　越山

雪山の白雲ゝ冬木立　荷蓑

冬木ゝ住れあゝて高尾　甲斐　石牙

鶏頭や雨を吸ひ乾す乾草　木膳
広濤やいつの蘇鉄の実の赤　白軒
鶏の声聚まる秋の夕　白雄

獅子舞

一切を上手に見せる獅子太鼓　麦穂
石ころ一筋なる川の川　紫暁
新らしい紙幣や食べる星　几董
鴛鴦や色とりどりの胸ふくら　月溪

鴨なくや夜更て流れ水のうち　春坡
古傘の孫ぶさむし閻魔堂　三の木朶
古寺の雪ぬ富士見ぬ三むしの中　寸来
ものとくとかはる焚へし冬の月　蓼太
ふるの雨や竹の秋　重厚
大とりや蕎麦つの乃ち　小かく　八市

跋

乞食嚢は何をかおさむる
咏し石山の杉なる木かげの
おち椎芭蕉の翁の園の桃青来
叟かあつめる梢の柿丈草
法師か影のへ乃法ち栗の里乃の俤
露藤乃木曽の橡乃外より野乃
ちりまかる花嫉枱のかけゐる月
之をありあつめしてはしり風

雅のまたけとなれ俳諧あらし
重厚入道はかつて竹園の仕へを
辞して身を順礼者の姿は
たつらん東坡居士の上は玉皇大
帝ま儀まで下は悲田院
乞児と枕をともまを拝とし給ん
和漢同一味の摘業なるへし
さしてその絲を括るものなれ

浅草の野人随斎成美

彫工 廣井秀峨

昭和十四年八月

池上氏家本より

俊定